ハハ艦隊海戦譜

終戦篇

横山信義
Nobuyoshi Yokoyama

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉　画　高荷義之
地図・図版　安達裕章
編集協力　らいとすたっふ

目　次

第一章　六隻の切り札　9
第二章　邀撃海面　35
第三章　決戦発動　51
第四章　反撃の烈風　79
第五章　巨艦激闘　115
第六章　終局の光　201
終　章　239
あとがきに代えて　254

140°E
150°E
160°E
170°E
40°N
30°N
20°N
10°N
0°
10°S
20°S
横須賀
東京
小笠原諸島
父島
母島
マリアナ諸島
サイパン島
テニアン島
グアム島
ウルシー環礁
エニウェトク環礁
トラック環礁
メジュロ環礁
アドミラルティ諸島
ビスマルク諸島
ラバウル
ニューアイルランド島
ブーゲンビル島
ニューギニア島
ニューブリテン島
ソロモン諸島
ガダルカナル島

西部太平洋要図

120°E
130°E
100°E
110°E
30°N
20°N
10°N
0°
10°S
20°S
呉
佐世保
沖縄
台湾
海南島
南シナ海
フィリピン
パラオ諸島
バベルダオブ島
ペリリュー島
スル海
スル諸島
ミンダナオ島
タウイタウイ島
セレベス海
ブルネイ泊地
ボルネオ島
スマトラ島
リンガ泊地
セレベス島
ジャワ海
ジャワ島
フロレス島
ティモール島
オーストラリア

欧州要図

リヴァプール
ロンドン
ハーグ
ブレーメン
ハンブルク
ベルリン
シェドルツェ
ブレスト
ブリュッセル
ブライトン
ポーツマス
プリマス
プラハ
パリ
ミュンヘン
チューリヒ
ブダペスト

八八艦隊海戦譜

―終戦篇―

第一章　六隻の切り札

1

八門の砲口に、閃光がほとばしった。
巨大な砲声は、百雷のごとくであり、鋼鉄製の艦体は、発射の反動に震える。
剱型巡洋戦艦の一番艦「剱」にとり、昭和一五年一〇月に戦われた小笠原諸島沖海戦以来、三年四ヵ月ぶりの斉射だった。
各砲塔の内部では、次発装填が始まっている。
揚弾筒の最上部、換装筒の中で準備されていた四六センチ砲弾が、装填盤に乗せられる。
装填盤が前方に移動し、主砲弾が砲身内部に押し込まれ、薬室に装薬が充填される。
流れるような作業は、各砲塔の一番砲と二番砲で同時に行われ、二門の砲身に主砲弾の装填が完了する。
「発令所長より砲術長。全主砲の次発装填完了。各砲塔とも、装填時間は四〇秒です」
「了解！」
発令所長臼杵太郎大尉の報告を受け、砲術長三国四郎中佐はごく短く応答を返した。
「だんちゃーく！」
主砲発射後の時間を計測していた細野隆夫一等水兵の若々しい声が響いた。
三国は、直径一八センチの大双眼鏡を通して、「剱」の右舷側海面を注視した。
水平線付近に、奔騰する飛沫が見える。
「剱」が放った四六センチ砲弾八発が、相模灘に浮かぶ標的に命中した瞬間だ。
「砲術より艦長。次発装填、並びに弾着を確認しました。装填時間は四〇秒であります」
「御苦労。これで本艦は、連続斉射が可能になったわけだ」
「剱」艦長陶久道大佐が、満足感を感じさせる声で返答した。

三国もまた、二つの大きな喜びを感じている。
憧れていた職に就けたこと、そして自分の乗艦「剱」が近代化改装を完了し、開戦時よりも格段に強力な艦に生まれ変わったことだ。
三国は開戦時、「剱」の副砲長の地位にあり、敵の中小型艦から「剱」を守る役割を担っていた。
砲術を志した者として、いずれは帝国海軍最強の剱型巡戦や、剱型に次ぐ威力を持つ紀伊型戦艦、加賀型戦艦等の砲術長や艦長になりたいと願っていた。
小笠原諸島沖海戦の終了後、三国は軽巡洋艦「奥入瀬」の砲術長に任じられ、軍艦一隻の砲戦指揮全てを司る立場となった。
乗艦の「奥入瀬」は、蘭印を巡る一連の攻防戦に参加した後、ソロモン諸島ブーゲンビル島を巡る戦いにも投入された。
厳しさを増す戦局の中、三国は同艦の砲術長として戦い続け、敵艦と何度も砲火を交えた。
「奥入瀬」に着任したときには少佐だったが、昨年四月、「奥入瀬」砲術長の任を解かれるまでの間に、中佐に昇進していた。
「奥入瀬」から降りた後、三国は戦艦「山城」の砲術長に任ぜられたが、同艦は第一次シンガポール沖海戦での損傷箇所を修理した後、もっぱら内地で訓練に使用されており、出撃の機会はなかった。
戦局悪化の情報は「山城」にも伝わり、三国も焦りを感じないではいられなかったが、同艦の艦長篠田勝清大佐は、
「いずれ必ずお呼びがかかる。今は焦らず、技量を向上させることだけを考えろ」
と言い聞かせた。
前線に出る機会がない分、訓練の時間はたっぷりある。
「山城」での砲術長勤務は、戦艦の主砲の扱いに慣れるための修行と考えよ、と篠田は忠告したのだ。
「山城」での修行は、およそ半年後に終わった。

一〇月初め、三国は「『劔』砲術長勤務ヲ命ズ」の辞令を受け、かつて副砲長として勤務した「劔」に戻ることとなったのだ。

「劔」は小笠原諸島沖海戦終了後、損傷箇所の修理と併せ、近代化改装が実施されることに決まったため、長期のドック入りを余儀なくされた。

開戦前より、弱点とされていた水圧装置を改良し、連続斉射を可能にしたことと併せて、対空火器を増強した。

更に、通信機を最新のものに交換すると共に、近年重要性が増している電波探信儀や、敵の電探波を探知できる逆探を搭載し、索敵能力を高めたのだ。

三国が着任したときには、長きにわたった「劔」の改装も最終段階に入っていた。

戦局の焦点は、北部ソロモンやラバウルから、トラック環礁やマーシャル諸島に移っており、軍令部からは毎日のように、「劔」の改装を急がせる催促の声が工廠に届いていた。

着任後、最初の三ヶ月間はその慌ただしさの中で過ぎ去り、今――昭和一九年二月二日、「劔」は生まれ変わった姿を洋上に浮かべたのだ。

改良された水圧装置は問題なく働き、各砲塔とも二門の砲身に四〇秒で次発装填を完了することが確認されている。

「穂高」と「乗鞍」――竣工時点から、既に改良された水圧装置を搭載していた姉妹艦に、「劔」はようやく追いついたのだ。

「砲術長席の座り心地はどうだ？」

陶が、笑いを含んだ声で聞いた。

着任の申告をしたとき、三国は陶に、「劔」に副砲長として乗艦していたこと、戦艦、巡戦の砲術長職、わけても劔型のそれにはかねてより憧れていたことを話している。

「心身共に、引き締まる思いです。これまでに務めてきた、どの職よりも」

「本艦は、開戦時は紛れもなく帝国海軍最強の戦闘

艦だったが、今は違う。『大和』と『武蔵』が戦列に加わった今、剱型は二番手にならざるを得ない。それでも、本艦への憧れは変わらないかね？」

「無論です」

三国は、一切躊躇せずに答えた。

剱型巡戦に対する三国の思い入れは、同型を初めて自分の目で見て以来のことだ。

前期型の「剱」「燕」であれ、後期型の「穂高」「乗鞍」であれ、八八艦隊計画艦一六隻の中で最も大きく、かつ力強い艦容を持つ巡戦の姿は、目の奥にはっきりと焼き付いている。

ポスト八八艦隊となる新鋭戦艦が竣工したからといって、憧れが消えることはない。

また三国は、剱型が大和型に比べ、劣っているとは思っていない。

火力、防御力は多少落ちるかもしれないが、機動力は優っている。

乗員の働き次第で、「大和」「武蔵」を上回る活躍ができるはずだ。

「頼もしい限りだ」

陶は、満足げな声で言った。二、三秒沈黙した後で、言葉を続けた。

「本艦を待っているのは、修羅の道だ。予想される米艦隊との決戦は、過酷なものとなるぞ」

三国は、殊更に力を込めて答えた。

「本艦の砲術長席で死ねるなら、私は本望です」

2

「間に合ってくれたか」

連合艦隊司令長官古賀峯一大将は、大きく安堵の息をついた。

柱島泊地に停泊している連合艦隊旗艦「乗鞍」の長官公室だ。

本来であれば、連合艦隊の将旗は戦艦「大和」か「武蔵」に掲げられるべきところだが、現在は両

艦ともドック入りし、第二次トラック沖海戦で受けた損傷の修理中だ。

このため連合艦隊司令部は、同海戦を軽微な損害で切り抜けた「乗鞍」を旗艦に定めている。

この日――昭和一九年二月二〇日、艦政本部より、剱型巡戦の二番艦「燕」の修理と近代化改装が完了し、出渠したとの報告が届いた。

四隻の剱型巡戦ほど、前線への復帰が待ち望まれていた艦はない。

南方作戦の終了後に「剱」の近代化改装を始めたこと、第二次ティモール島沖海戦で「燕」「穂高」「乗鞍」が大きな損傷を受けたことにより、連合艦隊は、BS作戦――米豪分断作戦に始まるブーゲンビル島やラバウルでの攻防戦を、剱型抜きで戦わねばならなくなった。

切り札を欠いた八八艦隊には損害が相次ぎ、ブーゲンビル島沖で「加賀」「近江」「駿河」「赤城」を、ニューブリテン島近海で「高雄」「阿蘇」を、それぞれ失うこととなった。

「平時ならともかく、戦時中に『剱』の近代化改装を実施したのは、間違いだったのではないか」

「『燕』の修理は止むを得ないとしても、近代化改装までを行い、入渠を長期化させたのは失敗だったのではないか」

このような批判は、海軍省や軍令部、連合艦隊麾下の各部隊からも上がった。

艦政本部は、これらの声を受け、「剱」と「燕」が入渠している横須賀海軍工廠と川崎造船所に、修理と改装を急ぐよう促した。

剱型の後期建造艦「穂高」と「乗鞍」だけは、一足先に出渠し、昨年一一月の第二次トラック沖海戦に参加したが、「剱」「燕」の改装は、なかなか進まなかった。

「『剱』と『燕』には、もう戦う機会が来ないのではないか」

「両艦が改装を終わる前に、戦争が終わってしまう

のではないか」
　そんな危惧の声も、連合艦隊司令部や軍令部で囁かれた。
　そのような焦燥の時が、ようやく終わった。
「剱」「燕」は改装を完了し、晴れて戦列に復帰する運びとなったのだ。
「『剱』『燕』の復帰は喜ぶべきことですが、今度は他の艦の修理や整備が間に合わなかった、などということにはならないでしょうな」
「冗談でも止めてくれ、そんなことは」
　本気とも冗談ともつかぬ口調で言った参謀副長中瀬泝大佐に、古賀は険しい顔を向けた。
　不謹慎に過ぎる、と言いたげだった。
「来たるべき決戦では、我が連合艦隊は四六センチ砲搭載艦六隻を揃えて戦うのだ。日に日に強大化する米艦隊に対抗する術は、それ以外にはない」
　一同の目が、壁に貼られている艦隊の編成表に向けられた。

　――昨年一一月二〇日の第二次トラック沖海戦終了後、連合艦隊は大幅な編制替えを実施した。
　従来、第一艦隊は戦艦中心、第二艦隊は巡洋戦艦中心の編制として来たが、開戦以来の戦いで多数の八八艦隊計画艦を失い、第一、第二両艦隊の戦力維持が困難になったためだ。
　現在、第一艦隊には、帝国海軍の戦艦、巡戦のうち、最も強力な艦六隻を集中している。
　すなわち、第一戦隊の戦艦「大和」「武蔵」、第三戦隊の巡洋戦艦「穂高」「乗鞍」「剱」「燕」、第七戦隊の重巡洋艦「栗駒」「戸隠」「鞍馬」「生駒」、第一、第三の両水雷戦隊という編制だ。
　一方、第二艦隊――かつての巡戦部隊は、高速戦艦と巡洋艦が中心となっている。
　第六戦隊の戦艦「霧島」「比叡」「榛名」、第八戦隊の重巡「雲仙」「黒姫」、第九戦隊の重巡「衣笠」「古鷹」、第一一戦隊の軽巡洋艦「奥入瀬」「北上」「多摩」、第一二戦隊の軽巡「九頭龍」「渡良瀬」

「名取」「由良」、第二、第四の両水雷戦隊を擁しており、水上砲戦に際しては、高速を利しての斬り込み部隊の役割を担う。

開戦時に比べれば、艦の数では見劣りする。

だが、四六センチ砲の搭載艦六隻を集中した第一艦隊の火力には比類がない。

再編制を終えた連合艦隊、特に六隻の四六センチ砲搭載艦をもって、米軍の侵攻を必ず食い止める。

古賀の口調と表情には、その決意が滲んでいた。

「問題は、米軍がどう動くかです」

参謀長加来止男少将が表情を引き締め、ちらと中瀬を見やった。

「敵が、こちらの都合に合わせて動いてくれるわけではありません。参謀副長の言葉は、あり得る可能性を提起したものだと、私は考えます」

加来は、戦況図に指示棒を伸ばし、米軍の占領下に入った島々を順繰りに指した。

第二次トラック沖海戦の終了後、新たに米軍の手中に落ちたのは、マーシャル諸島最西端のエニウェトク環礁と、ビスマルク諸島の西北西に位置するアドミラルティ諸島だ。

トラック環礁とニューブリテン島ラバウルを始めとするビスマルク諸島は、今なお日本軍が確保し続けているが、それらの地は、単に「日本軍の占領下にある」というだけだ。

トラック環礁は、昨年一二月一〇日の米機動部隊による攻撃と、米軍重爆部隊による空襲の反復により、全ての飛行場が使用不能となった。

米軍の制空権下に入ったトラックは、艦隊の泊地としても使用できなくなり、同地は事実上孤立した。

トラックが無力化されれば、そのトラックに支えられていたラバウルも無力になる。

米軍がアドミラルティ諸島を占領し、トラックとの間に楔を打ち込んだため、トラック、ラバウル間の連絡も断ち切られた。

米軍は上陸作戦を行うことなく、トラック、ラバ

ウルを無力化してしまったのだ。
大本営は今年一月、ラバウルへの補給を断念し、同地を守る南東方面艦隊司令部と第一七軍に現地自活を命じた。
トラックには、なお細々と補給が続けられているものの、同地がラバウル同様、守備隊将兵もろとも見捨てられるであろうことは確実視されている。
この状況下、米軍は早くも鉾先を次の攻略目標に向けている。
マリアナ諸島のグアム島、及びトラックとフィリピンの中間に位置するパラオ諸島には、既に米軍の四発重爆が偵察に飛来しているのだ。
米軍が、マリアナに来るのか、パラオに来るのかは、現時点では分からない。
ただ、軍令部の第五課は、
「米太平洋艦隊が、第二次トラック沖海戦の損害から回復する時期は、今年四月」
と推定している。
第一、第二両艦隊の全艦が出撃可能となるのは、四月末だ。
連合艦隊が戦力を整える前に、米軍の新たな攻勢が始まることが懸念された。
「米軍の来寇時期は、軍令部の推定よりも遅くなる可能性があります」
情報参謀磯崎稔中佐が発言した。
幕僚全員の眼が、磯崎に向けられた。
「中立国の大使館を通じて得られた情報ですが、米国は昨年末、ミシガン級、ミズーリ級に続く新鋭戦艦を竣工させたとのことです。全長はミズーリ級を凌ぎ、全幅は我が大和型に匹敵する巨艦だとのことです。新たな攻勢は、新鋭戦艦の慣熟訓練の終了を待ってからではないか、と考えられます」
話している最中に、古賀の表情が微妙に変わるのを、磯崎は認めた。
「全幅は我が大和型に匹敵する巨艦」と口にしたところで、眉がぴくりと動いたのだ。

「兵装は分からぬか？　四六センチ砲、もしくはそれを上回る砲を搭載している可能性はあるのか？」
「現時点では、三連装砲塔四基ということしか判明しておりません。ただ、ミシガン級、ミズーリ級の主砲口径が四〇センチに留まっているところから見て、新鋭戦艦の主砲も、四〇センチ砲である可能性大と考えられます」
「四〇センチ砲一二門なら、それほど恐ろしい相手ではありませんな」
作戦参謀野間英三郎中佐が安心したような声で言い、幕僚たちの多くが、同意するように頷いた。
四〇センチ砲一二門といえば、ダニエルズ計画艦のサウス・ダコタ級戦艦と同じだ。
そして帝国海軍は、小笠原諸島沖海戦でサウス・ダコタ級戦艦六隻と戦い、勝っている。
「侮りは禁物だ」
古賀が、殊更厳しい表情で言った。
「ミシガン級、ミズーリ級は、ダニエルズ計画艦のサウス・ダコタ級より火力が小さい。にも関わらず、我が軍の戦艦は、何隻もミシガン級やミズーリ級に沈められている。サウス・ダコタ級と同等の火力しか持たぬ戦艦、ではなく、新鋭艦のミシガン級、ミズーリ級より三割以上強力な火力を持つ戦艦と考えるべきだろう」
「そのような戦艦は、実在するのでしょうか？　米国の軍艦には、パナマ運河を通行可能でなければならない、という制限があったはずです。全幅が『大和』に匹敵する艦なら、パナマ運河は通れません」
航海参謀立花止中佐の疑問に、磯崎が答えた。
「南米のホーン岬沖を回れば、大西洋から太平洋への回航は可能です。米国は、本当に必要とする軍艦であれば、パナマ運河の通行にはこだわらないでしょう」
「新鋭戦艦の就役を待ち、我が大和型に対抗し得る態勢を整えてから進攻を開始する……か。実に用意周到な、それだけに容易ならぬ敵だ」

加来の言葉を受け、古賀が言った。

「敵も、不退転の決意で我が軍との決戦に臨まんとしていることは間違いない。それだけに、負けられぬ一戦だ。最悪の事態が起きた場合、本土が敵の巨砲に蹂躙される可能性すら考えられる」

しばし、沈黙が長官公室を支配した。

大和型二隻と剱型四隻は、世界のどの海軍も持たない強大な戦力だが、同時に帝国海軍が持つ最後の切り札でもある。

その切り札を使って敗北した場合、もはや米太平洋艦隊の侵攻を止める術は失われるのだ。

ミシガン級、ミズーリ級が、本土近海に現れ、帝都を始めとする諸都市に巨弾が降り注ぐ悪夢のような光景が、現実のものとなりかねない。

来たるべき決戦は、亡国を食い止めるための、最後の機会となる。

三九年前に日本海海戦を戦った東郷平八郎司令長官と同等の――いや、それ以上の覚悟で、決戦場に赴かねばならない。

その決意が、厳しく引き締められた古賀の表情から感じられた。

「米軍の新鋭戦艦については、引き続き情報参謀が調査を進めてくれ。新たに判明したことは、適宜報告して貰いたい」

古賀は表情を和らげ、改まった口調で命じた。

決戦に勝つためには、敵を知ることが肝要だ。この場で推測するそれよりも、事実を確認することだと言いたげだった。

古賀が着席すると、加来が新たな問題を提起した。

「米艦隊との決戦に際し、制空権をどのように確保するか。これを決める必要があります」

「うむ」

古賀が頷き、先を続けるよう促した。

「米艦隊との決戦に際しては、母艦航空隊だけではなく、基地航空隊の戦力活用が勝利の鍵になると考えます。この点につきましては、第二次トラック沖

海戦と状況は変わっておりません」

航空参謀の三重野武中佐が、壁に貼られている編成表に歩み寄り、新たに編制された第三艦隊に指示棒を伸ばした。

第三艦隊は、南方作戦の終了後、一旦解隊されたが、従来とは大きく異なる艦隊として再編制されたものだ。

連合艦隊は、第一、第二両艦隊の再編制と併せて、従来水上砲戦部隊の指揮下にあった空母部隊を切り離した。

第二次トラック沖海戦に参加した空母は、祥鳳型が六隻、飛鷹型が四隻だったが、その後、祥鳳型の拡大改良型である神龍型空母二隻が戦列に加わっている。

連合艦隊では、これらを第一から第五までの五個航空戦隊に再編制し、第三艦隊司令部が全航空戦隊の統一指揮を執るものとしたのだ。

各航空戦隊は、空母二隻ないし三隻、水上機母艦一隻、二個駆逐隊から成る。

空母一二隻の搭載機数は、常用四五八機、補用四〇機に達する。

そのほとんどは戦闘機であるから、艦隊の直衛には、充分な戦力を持つように見える。

だが、次の戦いで米軍が投入して来るであろう空母は七隻ないし八隻、艦上機の総数は六〇〇機から七〇〇機と見積もられる。

第三艦隊の航空兵力だけでは、決戦時の制空権確保は難しい。

それを補完するのが、基地航空隊だが――。

「諸官も承知していると思うが、基地航空隊は兵力の消耗が激しい」

加来が指示棒を戦況図に伸ばし、ラバウルとトラックを交互に指した。

帝国海軍の基地航空隊は、ラバウルの第一航空艦隊とトラックの第二航空艦隊があるが、前者はブーゲンビル島から頻々と飛来する敵機の迎撃戦で消耗

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。